

たかとう匡子さんの詩集『耳風目風』(思潮社)から「幻色」全篇。

そのとき

時間を越えたこちら側に  
かつて見たこともない赤花を見た

膨張したり縮小したり

うごめいているばかりの根も葉もない植物

その下を歩きつづけていた

疑うことすら知らずに雨あがりの先ばかり見て

折りから山の稜線に落ちる夕陽

ああ真つ赤な

あの水滴の群れ

最寄り駅へ坂道をくだっているようだった

とつぜんビルディングが立ちはだかり

視界をさえぎられた

廃屋の

廃市の

廃語の

すべては廃れてなにもない

だから手ぶらで

一気に突きあげ突きあげられて縦揺れの今はないビルの

記憶

窓枠という窓枠が北によじれて

吹き飛んだ屋根の下には

それでも円やかな朝が

転々と

やがてアスベストが大都会を覆い

空が剥がれて落ちてくる

碁盤遊びだった

記憶は今も湿っている

漆喰で固められた

果境の曲がり角で

樹木の翳だけが横たわっていた

根っこは狼狽

壊れたコンクリートの亀裂部から衝撃を縫って

なりふりかまわず飛び出してきたその根もない葉もない

赤花のこと

わたし無知だった

廃屋の

廃市の

廃語の

すべては廃れてなにもない

てのひらに掬ったとき

また幾度となくこんどは左右に揺れた

今までなかった内側がねじれて湾曲して引き裂かれて

不完全なまま完全に

くつきりと姿を現したのは

時間を越えて

性懲りもなく

奇妙としか言いようのないあの色

たかとうさんは1945年の姫路空襲で3歳の妹を亡くし、

95年には阪神淡路大震災を体験されている。二度の不条理を体験したたかとうさんは、詩を書くことは自分の言葉を回復するすべだった、と逃げ場をもたない詩作の現場を歩いてこられた。

引用した詩にも如実にあらわれているのだが、日常のなかに過去が身をさらし、日常のなかに非日常が姿を見せている。その先にあるのは、言葉の根っこところで、現実を支持していいのか、支持すべき現実はあるのか、言葉はわたしを支持してくれているのか、そんなおもしろいをだきかかえたまま「たかとう匡子を生きている」言葉の現実があり、いつてみれば、そのことがまた、たかとうさんの詩の現場を支えていることでもある。

あるいは、こういうふうにいえばいいのだろうか。ニュートンの古典物理学では「時間」は均一的に一方方向に、過去から未来へ流れていくものだったのだが、アインシュタインやミンコフスキーの現代物理学では、「時間」は過去から未来へ流れることなどなく、時間は空間と同じように広がりであり、過去も現在も未

来も一様に拡がっていて、それらの区分がない。(なぜそうなのかは、そのことを説明するのが目的ではないので省きます)

だから、現代物理学では、現在だけがリアルではなく、過去も未来もリアルに存在すると考えられている。現在という物理的に特別な瞬間など存在しないし、いま以外にもさまざまな時間が存在している、というのが現在の「時間」にたいする考え方なのだが、そういうことを頭に入れながらたかとうさんの作品を読ませていただくと、そのことが迷うことなく表現されていて、過去も現在も未来もたかとうさんにとってはリアルであり、いまだけがリアルではないということがくりかえし語られている。いつてみれば、たかとうさんはミンコフスキー幾何学の時空のなかに自分を置いている。

たかとうさんの時間は過去も現在も未来もないという、この世間の常識からはずされた空間を漂いつづけることでしょうか「たかとう匡子」を終結する方法がないのだと、そういうふうな自分の在り方に腹を括っている。

巻末に置かれた「わたしと猫と蟋蟀」全篇。

きっかり時間どおりに

いつの日からか庭を往復するようになった

雄猫は

冷たい月光のなかで狩りの姿勢をとっている

急速に気温がさがり均衡を欠いたか

それとも無防備にこころをひらいたか

蟋蟀は

ずれた季節にもはや飛ぶ気配はない

猫なりの知能指数は謎めいている

中空へむかって

猫と蟋蟀のよぎる沈黙の対峙は果てない

季節はいちめんの枯野

乾いている

傾いている

そのうえねじれにねじれて

時は文明の黄昏どき

目を合わすまいとしていたのに

冷たい月光のなか

猫は蟋蟀から視線をはずし

おもむろにわたしをみた